

筑紫の大宰の時の春苑梅歌に追和する一首

四一七四番

春のうちの 楽しき終へは 梅の花 手折り招き  
つつ 遊ぶにあるべし

霍公鳥を詠む二首

四一七五番

ほととぎす 今来鳴きそむ あやめぐさ かづら  
くまでに 離るる日あらめや

四一七六番

我が門ゆ 鳴き過ぎ渡る ほととぎす いやなつ  
かしく 聞けど飽き足らず